

瀬古確著 「萬葉集に於ける表現の研究」

鶴, 久

<https://doi.org/10.15017/12228>

出版情報 : 語文研究. 26, pp.65-69, 1968-10-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

「萬葉集に於ける表現の研究」

鶴 久

後記によれば、本書は学位論文をもとに、その後の研究による関係論文を追加して成ったとある通り、大部分が著者半生のためまざる万葉研究の結晶ということができよう。題して「萬葉集に於ける表現の研究」という。表現とは周知の如く、非常に広い多様の意味をもつ語であるにも拘らず、あえて「表現の研究」とされた著者の意図は目次を一見しただけで、十分に付度されるように思う。それだけに万葉全般にわたる該博な研究が本書の内容をもりあげ、大局から見られた眼はすらく本書に行きわたっている。重箱の隅をつつくの譬喩たとへの如く、研究があまりに細分化されるにつれ、ややもすると研究者の視野も極度に狭くなりがちな今日、本書が江湖に見えたことは、反省と今後の研究の在り方をうながしている警鐘のように響き、敬服する次第である。

万葉集の研究は文学の面からは勿論、語学その他の面からも進められ、急速の進歩をとげている。その緻密さはあまりその比を見ないと言っても過言ではないくらいである。和歌の集という性格上、文芸研究においても現存の上代文献では他を押し

てその対象となり得、上代語の研究においても、その言語資料の豊富な面において類がないため、自然、上代における研究の目は万葉集にそがれて来たのも当然なことであったのである。それ故、色々な面から開拓され、部分部分においては掘りつくすべき所は掘りつくした感がするほどの発展をしているのである。したがって、本書の或一部においては、或いはより精細で緻密な研究があるかもしれないが、それは対象によって、また対象の把握の仕方、研究の目的によって相違するのであり、網の規模・網の目の大小は補獲する魚の如何によって定まるが如く、少々のキメのあらさは本書の価値を低めるといふものではない。著者には夙に「大伴家持の研究」を上梓されており、「万葉雜記——醜の御楯——」「太宰府園の歌——万葉の国筑紫——」の万葉関係の著をはじめ、「近代日本文学史」「日本文学理念の展開」「日本文学の鑑賞」などの多くの著書があるのを見て、著者はひとり万葉集のみならず日本文学全般にわたって、広い視野のもとに考察の目を向けられ、それが著者の研究の底流として一貫して流れていることを見落すことはできない。古今・新古今はもとより芭蕉・蕪村・良寛……等に至るまでの自然観照についても考究されていることを知っている筆者には著者の構想がいかに龐大であるか理解できるように思う。されば「萬葉集に於ける」と限定されているものの、後続する平安時代の文学作品等をも常に背景にしながら考察をなされているの一点からしても著者がいかに日本文学全体を対象としていられるかが理解でき、本書の意図も十分に伺うことができる。つまり、本書の意図する表現の研究は対象のあまりに大なるが

故に、小魚は恢恢たる網の目から逃れたかもしれぬ。しかし、表現という大きな魚は確かに捕獲されていると思う。

本書は第一章・部立別の考察をはじめとし、第二章・作者別の考察、第三章・歌調の考察、第四章・歌体の考察、第五章・用字の考察、第六章・修辭の考察、第七章・万葉集の表現の七章から成っている。第一章は第一節・雑歌の表現、第二節・相聞歌の表現、第三節・挽歌の表現の三節からなり、第二章は第一節・人麻呂の表現、第二節・赤人の感覺表現、第三節・憶良の表現、第四節・旅人の表現、第五節・家持の表現の五節からなり、第三章は第一節五七調の成立に就いて、第二節・七五調の成立に就いての二節からなり、第四章は第一節・長歌の構成、第二節・旋頭歌に就いて、第三節・短歌の結尾様式に就いて、第四節・短歌の連作に就いて、第五節・問答的歌謡の一傾向の五節からなっている。そして、第五章は第一節・人麻呂作歌並びに歌集の用字、第二節・家持の用字、第三節・巻五の用字、第四節・巻十三の用字、第五節・巻十四の用字、第六節・巻十五の用字、第七節・訓仮名に就いて、第八節・用字法上に於ける漢文的なるもの、第九節・万葉集用字の視覚性の九節からなり、本書の庄巻といえる。第六章は第一節・人麻呂の修辭、第二節・万葉集の修辭からなり、第七章・万葉集の表現を以て結びとしている。このように目次を並べてみると、これ以上いたずらに贅言を費す必要はないと思うが、以下、紙数の許すかぎり簡単に紹介させていただく。

「第一章・部立の考察」 最初に雑歌の表現の考察がなされ前半は巻一・巻三におけるその種々相、後半は巻八・巻十にお

ける自然風物に触発された歌について考察が行われ、そこに風流閑雅な文人趣味の自然観照がげざやかに表われており、古今新古今と比考して、古今集に綿々と受つがれているとされる。相聞歌の表現においては直接的に恋の苦しさ、はげしさを歌ったり、外界の風物に寄せて自分の思を託し、時には譬喩によって婉曲に歌いあげるなど、相聞歌における表現を網羅してられる。特に挽歌における表現との対比において、挽歌では實際の死を表現するのに死という言葉を用いることなく「磐根をまく」「雲隠る」をはじめ「もみち葉のように過ぎ行く」「往ぬ」「臥やす」「いでます」「鳥がくる」「道に逆う」などと直接表現をさけているのに対し、相聞歌では「今にも死にそうです」と恋の苦しさに堪え得ぬ思を死という語で盛んに表現している点を見事に指摘されている。

「第二章・作者別の考察」 第一節で人麻呂の表現の特色をその詞句に求め、民謡的色彩が濃厚に残存していることを類同歌により明らかにし、反面人麻呂の獨創性についての考察をも看過してはられない。第二節では赤人の感覺表現において、人麻呂・黒人・旅人・坂上郎女等の歌人と対比しながら、その特徴を見出し、自然の景物を詠ずるにあたって視覚・聴覚を共に動員して、純然たる自然詠の少ないことを指摘される。第三節・憶良の表現では特にその用語を主として考察され、対句が人麻呂に次いで多用され、枕詞はほとんど普通一般に使用されているものに限り、衣食住・人事に関する孤語に憶良獨特の用語を見出される。旅人の表現においては政治的にも家庭的にも孤独なるが故に現われた特色を重視し、短歌の結尾様式において

記紀歌謡、初期万葉ぶりの詠歎の形を好んで用い、憶良の倒置的手法を愛用したことと対照させて、その特徴を明白にされている。そして、讃酒歌十三首も陶淵明・李白・杜甫等の酒を歌った詩と一脈相通じるものがあるとして、渊明の飲酒・独樹・孤松の如く、旅人の孤独表現は彼の中国文学に対する深い教養に根ざすものであるとされる。家持の表現は繊細流麗な点にその特色を見出し考察の目を向けられている。そして、三句切の歌が多いことは家持以前の歌人と著しい差異があること、第五句における名詞止の手法、枕詞は単に音調を整えるために用い序詞の用法に清新な点が強く見られること、修辞においても無技巧で虚飾のないところに優れた面が存在することを指摘される。そうして、動植物の題材の使用にも、他の歌人に比して多種多用していることも見落してはいられない。

「第三章・歌調の考察」ここでは五七調・七五調の成立を史的に見て考察されている。

「第四章・歌体の考察」先ず、長歌の構成は枕詞・序詞・対句等によって形式の反覆からくる単調さを緊縮させ、それが記紀歌謡に対する万葉集の特色をなしていること、記紀・初期万葉・人麻呂・憶良・坂上郎女・赤人・金村・虫麻呂・家持における句数の多少と平均句数・段落の有無・反歌の有無を調査し、対句の面から各歌人の特徴を見出そうとされる。就中、人麻呂にその特色が顕著であり、それも玉台新詠等の中国詩の手法に刺戟されたのではないかとされる。旋頭歌に就いては「五七七・五七七」の三句切が多い点から、片歌形式の二つ集ったものであることを形式内容の両面から証していられる。その

他「五七七・五・七七」「五七・七・五七七」「五七七五七七」
「五・七七・五七七」「五・七・七・五・七・七」「五七七・
五七七五・七七」の如き形式も見られるが「五七・七五・七七」
「五七七五・七七」の如き句切れを示すものは皆無であること
から、旋頭歌は五七調隆盛時代の所産であるとされる。第三節
では短歌の結尾様式をその倒置表現の面から、記紀歌謡・初期
万葉・人麻呂・赤人・憶良・旅人・家持等の短歌について考察
し、各々の特色を見出し、家持はこの面においても特に修辞
に腐心しているとされる。第四節の短歌の連作については、修
辞・歌体等に形式美を求めた人麻呂・旅人・憶良等によって、
短歌一首では到底醸し出し得ない連作の妙味を発揮していると
される。第五節では問答的歌謡の一傾向として、長歌とその反
歌による問答形式に留意され、それが贈答歌・相聞歌にもその
傾向が存在すること、巻十五の中原宅守と狭野茅上娘子の贈答
歌・旅人の日本琴・玉島川に遊んだ一連の作……等を用例とし
て考察されている。

「第五章・用字の考察」前述もした如く本書における白眉
といえる。第一節において人麻呂作歌及び人麻呂歌集の用字の
特色を、第一にそれぞれの語句の表記字面に見られることを指
摘し、第二に人麻呂歌集の略体・非略体の書式を五音七音の各
句を何字で表記するかという点から極めて興味深い考察をなさ
れている。即ち、心・命・古・愛・紅・紫・徒……等の一字で一
句を表現する文字は通常一般に多用されて伝達を誤まらせる恐
れのない正訓文字に限られ、この傾向は一句を二字で表記する
場合にも看取され、罪薇・蒼天・髣髴・鬱悒……等の特異な用字

と対照的用法をなしていることを実証していられる。第二節では或語を表現するにあたって、如何なる文字を用いてするかという面から考察され、漢字の正用・仮用の両面が多く、文字の取捨選擇にも各人の好みが多く見られると結論される。そして卷三・四・六・八と卷十七以下の四巻とを比較して、漢字の正用から仮用への傾斜を認め、家持の用字意識を検討されている。第三節では卷五の用字を作家毎に調査、検討され、鎮懐石の歌員外故郷を思う歌・後に追和せる梅の歌四首・松浦河に遊ぶ序並びに歌・佐用姫伝説歌・男子名は古日を恋うる歌三首等従来作者に諸説が見られる歌について、その作者を推定しようと試みられている。第四節では卷十三の用字について考察され、戯書・義訓が多用され、訓仮名の愛用せられている点に特色があるとされ、長歌とその反歌の用字には共通点があり、特に三二八四番と三二八五番、三二八六番の或本歌とその反歌及び三二八八番の或本歌の五首一聯の長反歌、三三一四番の長歌とその反歌及び或本の反歌からなる五首一聯の作は同一人の筆になるとされる。第五節では卷十四の用字の特色を集中の他の仮名書の巻と比較して、一字一訓の正訓文字や或語を表記する仮名の組合せなどに見出しでいられる。特に、水都・河泊・左指・久草・物能・楊奈疑・古馬；等にも意図的な用法があると言われる。第六節では卷十五の用字と卷十四の用字の比較を試みることに、前半の遺新羅使一行の歌群と後半の中臣宅守と狭野茅上娘子との贈答歌の歌群には用字に差異が見られ、一人の編者によって統一せられるというより、それぞれ原本の面影を強くとどめていると見るべきであるとされ、両歌群が事件の接近

と共通の相聞性を有するが故に、一卷に編まれたものと結論されている。第七節では訓仮名は正訓中心の巻に多く見られ、巻により現われ方に片寄りがあること、しかも戯書や義訓と共用される傾向が看取されること、そして聯想的な用法が強く見られること、音仮名の一字一音主義が強いのに対し、訓仮名は一字二訓が圧倒的で対照的相違をなしていることを実証していられる。第八節では反読文字や漢文の助字等の漢文的色彩のある用法に言及し、反読文字にも反読すべきものとし、ないもの両方があり、和化されるにつれ、反読文字も反読されずに和文表記のようになって、次第に和文表記が発展して行く過程を想定されている。第九節では万葉集における視覚性に基いた文字用法の特色を多方面から多角的にとらえ、巻・歌群・問答・贈答歌・一首一首にも見られることを指摘され、可視的に変化の美を求めた万葉人の用字意識を把握していられる。

「第六章・修辭の考察」 特に人麻呂の修辭について枕詞・序詞から言及し、万葉集の修辭について反覆句・類句・慣用句から考察をなされている。

「第七章・万葉集の表現」 本章は第六章までの総括であり本書の結びをなしている。

以上、紙数も超過するほど縷々として紹介を試みてきたが、何しろ七百頁にあまる大著をわずか十数枚にて紹介しようとするのであるから、それ自体無理なことである。したがって、舌足らずの文が随所に見え、著者に対しても読者に対しても申しわけなく思う次第である。しかし、はじめにも述べたように、日本文学全体をたえず見通しながら、万葉集における部立別の

表現をはじめ、作者別における用語、歌調・歌体・用字・修辭
 ；等多方面におけるあやなす表現美を浮彫りにしようとした
 著者の意図が本書全体に流れていることは見過さないようにす

(昭和41年7月30日・風間書房刊行。非売品)

▼受贈雑誌 昭和43年1月～6(その二)

- 文学1～6月
 国文学解釈と鑑賞1～4月
 国文学解釈と教材の研究12～6月
 言語と文芸56～58
 文学語学47
 解釈11～5月
 国語学(国語学会)70～72
 万葉(万葉学会)66
 国文学伝統と現代1
 音声学会会報126・127
 連歌俳諧研究(俳文学会)34
 文芸研究(日本文芸研究会)57・58
 日本歌謡研究4・5
 古典と近代文学2
 書陵部紀要19
 万葉文学1
 軍記と語り物5
 説話(説話研究会)1
- 史迹と美術38巻3
 文芸と批評2巻6～8号
 人文論究(北海道学芸大学)28
 学園論集(北海学園大学)11
 北星論集(北星学園大学)4
 文化(東北大学文学部)31巻2
 日本文学ノート(宮城学院女子大学)3
 国語と国文学1～7月
 国語研究室(東京大学)6・7
 人文科学紀要(東京大学教養学部)44
 一橋論叢2～5月
 言語文化(一橋大学)4
 国文(お茶の水女子大学)28
 国文学漢文学論叢(東教大文学部)13
 学苑12～6月
 国学院雑誌11～4月
 国語研究(国学院大学)24
 野州国文学(国学院大学栃木短大)1
- 文芸研究(明治大学文学部)18
 明治大学教養論集40～43
 明治大学人文科学研究所年報8
 国文学研究(早稲田大学)37
 語文(日本大学)27・28
 日本文学(立教大学)19
 法政大学文学部紀要13
 成城文芸48・49
 論究日本文学31・32・33
 文学論藻37・38
 王朝文学15
 上代文学研究学会会報(東洋大学)18
 成蹊国文1
 成蹊大学文学部紀要3
 国文学踏査(大正大学)8
 駒沢国文6
 国文鶴見3
 富士論叢13巻1
 実践文学32・33
 短大論叢(関東学院女子短大)32・33